

公益財団法人 檉の芽会 御中

令和7年度伴走型就学・学習支援活動助成 実施報告書

【団体の概要】		①作成日	令和 8 年 5 月 12 日
②法人・団体名	特定非営利活動法人 浜松 NPO ネットワークセンター		
③ 団 体 所 在 地 (都道府県・市町村名まで)	静岡県浜松市中央区佐鳴台3-52-23		
④責任者氏名	島田 江津子	(役職名等)	代表理事
⑤担当者氏名	望月 真理子	(役職名等)	理事/事務局長/こども事業・中間支援担当

【奨学活動の概要】					
⑥助成交付決定番号	R07-039	⑦助成金額	99万円	⑧申請カテゴリー	F
⑨奨学活動名	訪問型得意支援				
⑩ 主 な 実 施 場 所 名・及びその住所	佐鳴台協働センター 静岡県浜松市中央区2-24-1				

⑪活動内容とその成果の概要（詳細は【様式3-2】又は別添資料にて記載・説明ください。）

・活動の目的や内容:不登校・ひきこもり・外国ルーツ・経済的困窮等の理由から浜松市の集団型学習支援に通えないこどもの学びと育ちを支え自尊感情を育むことを目的に【個別・訪問型】得意支援を実施した。基礎学力の定着に問題のある外国ルーツのこどもの勉強サポート・高校受験に向けた学習・不登校経験から通信制高校へ進学したこどものプログラミング指導を実施した。

・参加人数:中学生7名、高校生1名

・活動成果:こどもとの信頼関係を構築し、訪問型得意支援の場がひとつの安心する居場所となることで勉強や得意なことを見つけようとする意欲にもつながる。そのためにこども、講師双方にヒアリングを行いながらの支援を意識して進めた。結果として年度末のこどもヒアリングでは、「数学が分かるようになった」「英語の看板が目に入るようになり辞書で調べるのが楽しい」「無事に高校に合格しました」とのうれしい声を聴くことができた。

・購入した主な物品:高校入試過去問など

・活動から得られたもの:個別での支援のため、講師とこどもが様々な話をする時間にもなっており、勉強や生活の困りごと、家庭の様子やこどもの背景を知ることができた。様々な困難を抱えながらも自分なりの成長を遂げていくこどもたちを目の当たりにし、1対1での支援の大切さを再認識した。

⑫奨学活動の定量的把握（注：統計情報として参考まで把握するものです。活動成果等は上段⑩及び様式3-2等でご報告願います。）

支援対象	延べ人数 (A:人)	平均時間 (B:時間)	活動量 (A×B)	備考・補足・計算根拠等
中学生等	221.5	1	221.5	1回約1時間×月4回×9か月×約6人/月
高校生等	12	2.1	25	(1回2時間×7か月)+(5回×2.2時間×1か月)
大学生等				
学習支援員等	237.5	1	237.5	(1回約1時間×月4回×9か月×約6人)+(2時間×4人)
その他				
合 計			484	

⑬その他の定量的な数値（任意）

令和 7 年度伴走型就学・学習支援活動助成 実施詳細報告書

奨学活動名：訪問型得意支援

法人・団体名：特定非営利活動法人 浜松 NPO ネットワークセンター
作成者 氏名：望月 真理子

1. 取り組んだ課題や実践した目的・実施内容について

不登校・ひきこもり・外国ルーツ・経済的困窮等の理由から浜松市の集団型学習支援拠点に通えないこどもの学びと育ちを支え自尊感情を育むことを目的に【個別・訪問型】得意支援を実施した。

基礎学力の定着に問題のある外国ルーツのこどもの勉強サポート・高校受験に向けた学習・不登校経験から通信制高校へ進学したこどものプログラミング指導を実施した。

2. 実施した奨学活動の詳細

・活動内容の詳細

こどもの声を聴くことを中心に据え、希望の支援内容やこどもの様子を知るための面談を行うことからはじめた。親の感じている課題とこども自身の思いが違うこともあるため、双方に話しやすいように面談を親子別々で行ったこともある。基本はひとりにつき週に 1 時間の支援であるが、中学 3 年生の受験生においては受験までの日にちが僅かになると本人から教科を増やしたいとの声もあがったため、臨機応変に対応した。志望校の過去問にも取り組んだ。合格後は高校生活の準備として高校数学にもチャレンジした。



外国ルーツ 中学 2 年生
勉強の遅れが目立つので 2 科目
(数学と国語) を学びました

また登校不安定で中学校の別室に登校している生徒が勉強の遅れを心配していたので、本人の希望する英語を支援した。中学 1 年生(外国ルーツ)で英語を希望した生徒では理科の教科書をすらすら読めるものの、何かが書いてあるのかが分からないという問題があり、英語講師が理科の教科書を一緒に読み、説明をする時間も組み込んだ。

小学校から不登校の生徒は通信制高校に進学したが、得意なことを伸ばすために得意支援継続を希望し、オンラインでのプログラミング学習を行った。

父母の離婚時に家庭内で暴力などを見て傷つき、親の離婚後は母親と暮らしているが関係性があまりよくない生徒がいる。臨床心理士に勉強と心理サポートが受けられるように、経済的な面でのサポートをさせてもらった。講師の臨床心理士に母親もカウンセリングを受けられており、複合的な支援ができている。



中学 3 年生、合格と卒業の報告に来てくれました

- ・参加人数：合計 8 名
 - ★中学 3 年生 2 名、中学 2 年生 3 名、中学 1 年生 2 名、高校 1 年生 1 名
 - ★昨年度から継続中学生 2 名、高校生 1 名
 - ★スクールソーシャルワーカー（SSW）と養護教諭、臨床心理士の紹介により今年度支援を開始した中学生 5 名。
 - ★外国ルーツ 6 名
 - ★ひとり親家庭 5 名

※その他、紹介されたが家庭の事情により支援につながらなかった生徒：中学 1 年生 1 名、中学 3 年生 1 名、高校中退 1 名

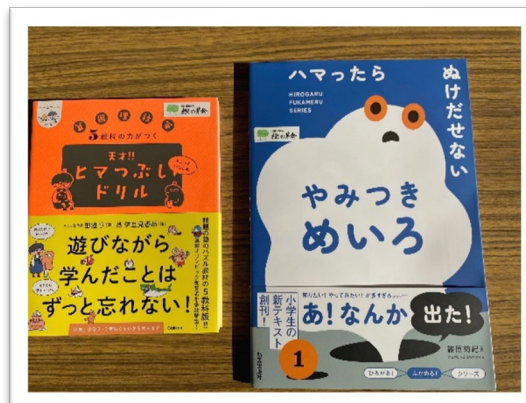
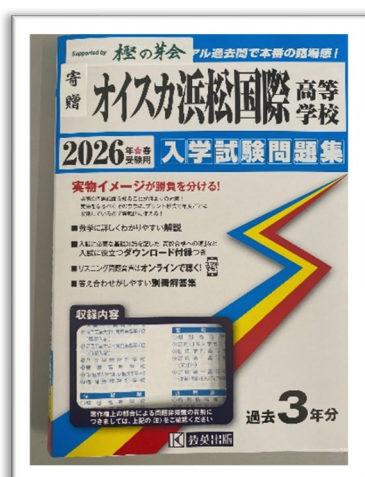
- ・周知方法や協力いただいた関係者

中学校の養護教諭、SSW には事業の説明をし、生徒の紹介を依頼。会場として利用している協働センターのスタッフには事業趣旨の説明を行い、当法人の様々な活動を紹介、報告もした。その後も協働センターの理解のあるスタッフがこどもが困っていると声をかけてくれて、連絡をくれることもあった。こどもの安心できる居場所として機能していた。

- ・学習支援員について

講師の先生は多様な困難を抱えるこどもへの理解のある先生にお願いしているが、当法人の考え方を伝え、思いを共有していくために頻回な連絡や相談を行った。個別の支援となるため、スタッフが会場に出向き、支援前後に情報共有、今後の課題などの擦り合わせを行った。また、2025 年 12 月 12 日には講師勉強会を開催。臨床心理士を講師に招き、支援時の悩み相談や今後のこどもとの関わり方や声掛けの仕方などについてアドバイスをもらった。

- ・購入した物品の写真



3. 本活動から得られたもの、反省点、課題、今後への発展性、等

【家庭環境により支援が開始できないケース】

① 面談を行い、本人が勉強をしたいということで支援を開始しようとしたが、当日に来なかったり、バイトの面談に行ってしまったり、連絡がつかなくなってしまった高校生1名、中学生1名がいた。この2名は姉妹であり、両親はフィリピン人。妹は中学生でありながら、家庭の仕事を手伝い学校に遅刻する。姉は定時制高校に入学したが親が教科書を用意してくれない、学校に来なかったことなどで中退した経緯があり、家庭環境にも問題を感じた。当初高校中退の姉は再度、受験をして定時制高校に再入学したいとの意欲を見せた。生活支援を兼ねた得意支援につなげなかったが、難しかった。親は仕事でほとんど家におらず、連絡が取れなかった。また本人も家の仕事を手伝い始めてしまい、親に教育を受けさせる意義を感じてもらうことも難しく、協力体制が構築できなかった。その間、養護教諭やSSWも情報共有や働きかけを行ってくれたが、親との連携が取れないと本人の意欲の継続もできないことを目の当たりにした。

② 中学1年生の女の子を養護教諭に紹介された。ひとり親家庭でヤングケアラーであり、小学校1年生の弟に発達障害があるので目が離せず、母親が仕事の日の放課後は弟の面倒を見ていた。弟の放課後デイサービスが見つければ支援を受けたいが、今はその状況ではないとのこと。勉強をしたい気持ちがあるが、複雑な家庭環境が原因で支援が開始できなかった。

【外国ルーツのこどもの学習の遅れ】

外国ルーツのこどもたちは学習の遅れが顕著であった。小学校算数や漢字に躓いているケースも多く、中学の途中からでは受験までにできることも限られてしまうため、本来は小学生のうちから支援を必要としている。1対1で丁寧 to 教えると理解が早く、記憶もしっかり定着するこどももいるので、小学校のうちから学習の支援が行き届いていたらと悔やまれることも多かった。

【支援日を忘れる】

支援予定日や教科書やプリント、筆記用具を忘れてしまうこどもが多いこと。前日の連絡をするとよい返事があるのだが、当日になって忘れてしまうこともある。スケジュール管理に課題を抱えているこどもが多い。そのため、スタッフが常に連絡をしてこども本人と親の双方にやり取りをしていなくてはならない。当日、講師が待っているのに生徒が来ない場合にもスタッフが双方への連絡をするなど、常に気にかける必要があった。また途中から携帯電話のアラーム機能をうまく活用することで忘れることがほとんどなくなったこどももいた。

【体調不良が多い】

体調を崩すこどもが多く予定している支援が進められないことがあった。一人の中学生は家に暖房がなく、とても寒いそうで冬の時期は風邪を繰り返していた。親が夜勤で働いており、一人でごはんを用意しているこどももいた。栄養面での心配もある。

【スタッフの事業保障】

こども、親、講師、養護教諭、SSW など関わった人すべてにリアルタイムで丁寧に対応することで事業が効果的に継続できている。今後の発展、持続のためにはスタッフが一人一人に寄り添い、伴走するための経費が必要。

4. 本活動におけるエピソード、思い、感想、等（任意）

・受験生2名がそれぞれの道へ。

① 5年間支援をしてきた外国ルーツ、ひとり親家庭のこども。小学生の頃は授業中に学校から出て行ってしまう。学習支援に来てやる気もなく、漢字一文字、計算1問やるのが精一杯だった。その間も理解のある講師が常に寄り添ってくれたことで勉強のためというよりも居場所としての機能を果たしていた。親でも学校の先生でもない存在が見守っているということが伝わればうれしいと思って支援を続けてきた。中学校でバスケットに入ったことで将来の夢はバスケの選手と話をしてくれるようになった。そこから勉強に向き合う姿勢もだんだん変化し、中3になると将来は母国でバスケでの大学進学も考えているため英語を学びたいと希望を伝えてくれた。この4月には定時制高校に進学し、お弁当も自分で作っているとのこと。早速アルバイトも始めて楽しく高校生活を送っていると近況を聞いた。5年の支援期間に大きな成長を感じられたこども。

② 中学3年生から支援を開始した外国ルーツのこども。勉強の遅れがかなりあったのだが、2教科、3教科と自発的に科目を増やして受験に向けて一生懸命頑張った。挨拶もしっかりでき、学校行事でも自らバンドを結成したり、応援団など何にでも全力で頑張る子だった。得意支援の講師から、とても素直に新しいことを吸収する力があると報告を受けていた。無事に第一志望の高校に進学し、意欲的に高校生活をスタートさせた。最後の面談では「高校の勉強に困ったらまた相談にきてもいいですか?」と聞いてきて、積極的に自分で道を拓いていける力強さを感じた。

・登校不安定なこどもの居場所として

① 中学校の養護教諭の紹介で出会った外国ルーツ中学2年生で登校不安定のこども。高校進学をしたものの、クラスには入れないので学習の遅れを気にしていた。一番苦手な英語を学びたいとの希望があり、得意支援を開始。講師の先生とのおしゃべりも楽しみつつ学ぶ場がひとつの居場所としての機能を果たしており表情も明るくなり、学校に行ける日が増えてきている。また、街に出かけた時にも今までは気が付かなかった英語の看板が目に入るようになって、辞書を使って調べる癖がついてきたと話してくれた。苦手だった英語の楽しさを見つけられてきているので引き続き継続を希望している。

② 小学校から中学校まで不登校でほとんど学校に行けなかったこども。中学の頃は家族としか会話ができなかったところから、得意なことを伸ばす支援としてオンラインのプログラミング支援を開始。共通の話題があるのでだんだんと講師の先生には打ち解け、オンラインでの得意支援がひとつの居場所として大きな意味を持って行った。2025年は通信制高校に進学し、レポートやスクリーニングが大変だが、プログラミングの支援を継続したいと希望があった。自尊感情を高め、ありのままの自分を認めてもらう場としての必要性を感じる。

・感想

講師の先生の中には元校長先生がいらしたこともあります。その先生からの感想を引用させていただきます。浜松市教育推進大綱では、＜不登校、外国籍、障がいのあるこどもなど、一人ひとりの多様なニーズに応じた支援をはじめ、いじめの防止等、誰もが安全・安心に学べる教育環境を提供します。すべてのこどもが社会性や自己肯定感を高め、将来に夢や希望を持つことができる社会を実現します。デジタルツールを活用し、すべてのこどもの可能性を引き出す学びを充実します。＞というような響きの良い言葉が掲げられているが、実際の学校現場では担任への負担も大きく、理想と現実にはギャップもあります。本当にひとりのこどもと向き合い、寄り添い続けるとは当法人の得意支援のようなことだと感想を伝えてくれました。学校ではできない濃い1対1の支援、それを継続する意義を強く感じさせられました。